

# シャトーブリアンの『革命試論』における 統治形態論

駿 河 昌 樹

- 1 理想の統治形態と「人間」
- 2 バルテルミー神父の『紀元前4世紀半ばにおける  
若きアナカルシスのギリシアへの旅』
- 3 「空疎なシステム」とタレス
- 4 ピッタコスとペリアンドロス
- 5 ギリシア七賢人の統治形態論
- 6 モンテスキューとルソー
- 7 社会の統治形態と人間内部の統治権

## 1 理想の統治形態と「人間」

エセックス大学やロンドン・スクール・オブ・エコノミクスの教授だった経済学者の森嶋通夫が、1999年時点で2050年の日本の没落を学問的に予言している。『なぜ日本は没落するか』（1999）がそれだが、ここで彼は、「人間が土台だ」と考えることによって社会とその未来を見る、という方法を取っている。

問題は将来の日本社会についての予想をすることだから、まず私が社会をどう考えているかを述べる必要がある。社会は一つの構築物であり、それには土台と、土台の上に建てられた上部構造がある。こういう社会観はおそらくマルクスのものであろうが、そこから一歩進めば私の考えは、彼

とは全く異なる。

マルクスは経済が社会の土台であると考え、私は人間が土台だと考える。経済は人間という土台の上に建てられた上部構造にすぎない。それ故、将来の社会を予測する場合、まず土台の人間が予想時点までの間にどのような量的、質的に変化するかを考え、予想時点での人口を土台としてどのような上部構造——私の考えでは経済も上部構造の一つである——が構築できるかを考えるべきである。<sup>(1)</sup>

これは、シャトーブリアン François-René de Chateaubriand が理想の統治形態について考察した時に直面した問題点を思い起こさせる。

彼は『革命試論 *Essai sur les révolutions*』（1797）<sup>(2)</sup>のなかで、古代ギリシアの賢者たち Sages とヨーロッパ近代のフィロゾーフたち Philosophes とを比較しながら、この両者の思考の違いを、「人間」についての識別のしかたの差に見ている。

ギリシアの賢者たちは人間を精神のあり方にもとづいて見ており、わが国のフィロゾーフたちの場合は人間を政治的な関係のあり方から見ていた。前者は、統治形態が生活慣習から導き出されてくることを求め、後者は、生活慣習が統治形態から導かれてくることを求めた。

(Les Sages de la Grèce aperçurent les hommes sous les rapports moraux ; nos Philosophes d'après les relations politiques. Les premiers voulaient que le gouvernement découât des mœurs ; les seconds que les mœurs fluassent du gouvernement.)<sup>(3)</sup>

このように書くシャトーブリアンはまだ29歳の若さだが、ともすれば、合理的思考によるアプローチのみに陥りがちになる統治形態についての考察において、「人間」をどの視点から見るかに注目し、ギリシアの賢者たちとフランスのフィロゾーフたちを比較しようとしている。哲学者ではなく、のちに文学者となっていく彼の特徴がここには現われているといえよう。文学的思考は、17世紀以来の合理的思考にもとづく理論や概念図に収束できない複雑系としての非合理的な「人間」なるものをどこまでも扱い続けようとするからである。

シャトーブリアンがこの時イギリスにいたことも影響しているかもしれない。イギリスは大陸的な合理主義的思考に抗う思考の場である。ハロルド・ラスキの後任としてオクスフォード大学で政治学を講じたマイケル・オークショット Michael Oakeshott が合理主義者批判に用いた表現を借りて言えば<sup>(4)</sup>、合理主義者というのは、「パルメニデスの教え——合理的議論によって判定せよ」を掲げ、「物事の価値、意見の正しさ、行為の適切さ、を決定する彼の『理性』の（正しく適用された場合の）力を疑わ」ず、「議論の基礎であり源である全人類に共通の『理性』、合理的考察の普遍的力、に対する信念によって護られて」いる者ということになるが、そうした合理主義者への批判がつねに知的認識の中に流れているイギリス、ということになる。青年時代にフランスのフィロゾーフたちに深く影響され、そこから思考法を学んだとはいえ、他ならぬ彼らフィロゾーフたちを淵源とするフランス革命によって、貴族階級の子弟としてイギリスへの亡命を余儀なくされたシャトーブリアンに、この風土が思考態度上の変更を迫らなかつたはずはない。前出の森嶋通夫がイギリスの大学の教授だったことも偶然とは言えないだろう。

『革命試論』のこの箇所<sup>(5)</sup>におけるシャトーブリアンは、ギリシアの賢者たちの側に与しようとするのでもなければ、フランスのフィロゾーフたちの側に与しようとするのでもない。革命の発生が人類史において初めてのことでなく、古代ギリシアでの革命やイギリスでの革命が歴史上に伝えられている以上、それらの資料を用いつつ、自分を巻き込んだ革命なるものの本質はどのようなものか、その発生のメカニズムはどのようなものかを人類史の観点から考究すべきだとの態度を彼は採ろうとしている。実際には、『革命試論』における考察はフランスのフィロゾーフたちへの批判に傾きがちではあるものの、彼がここで用いる思考法が依然としてフィロゾーフたちから学んだものであるためであろう、思考態度としては、危うい中立が保たれている。

## 2 バルテルミー神父の『紀元前4世紀半ばにおける若きアナカルシスのギリシアへの旅』

シャトーブリアンによれば、古代ギリシアにおいて芸術が各地に花開いた際、政治と倫理学が同時に展開された。この時に賢者たち Sages と呼ばれる一群の人々が現われたが、彼らは、「空疎なシステム *vains systèmes*」についてではなく、「民衆の幸福 *bonheur des peuples*」について真剣に考えたため、まさに“賢者たち”と呼ばれるのにふさわしい、とシャトーブリアンは考える。

これに対し、後に現われたソフィストたちは「空疎なシステム」のほうを扱い、「民衆の幸福」はないがしろにした。フランスのフィロゾーフたちは、こういうソフィストたちに酷似している、とシャトーブリアンは書いている。

『革命試論』の校訂者モーリス・ルガルール Maurice Regard は、シャトーブリアンの語る「民衆の幸福」に注を付し、ある著作の次の箇所への参照を促している。

当時、知性は何人かの徳の高い人々の手のうちにあった。賢者たち Sages の名で知られていた人々である。(……) 彼らはしばしば同じ場所に集まり、人間というものの特性について語り合った。

(Le dépôt des lumières était alors entre les mains de quelques hommes vertueux, connus sous le nom de Sages. [...] ils se réunissaient quelquefois dans un même lieu, pour [...] s'occuper des intérêts de l'humanité.)<sup>(6)</sup>

これは、バルテルミー神父 abbé Jean-Jacques Barthélemy の有名な『紀元前4世紀半ばにおける若きアナカルシスのギリシアへの旅 *Voyage du jeune Anacharsis en Grèce, dans le milieu du IV<sup>e</sup> siècle avant l'ère vulgaire*』(1788) よりの引用である。

アナカルシスといえば、古代ギリシアの七賢人のひとりとされた、スキタイ出身の紀元前6世紀の賢者で、キニク派の祖とされる。スキタイの王子グノウロス Gnouros とギリシア女性の息子で、兄カドウイダス Cadouidas は後のスキタイ王となる。エジプトのダリウス一世と敵対したスキタイ王イダンティルス Idanthyrse も彼の甥だった。紀元前588年頃にアテネに来てソロンの弟子となり、外国人でありながら初めてアテネの市民権を得た。率直であからさまな彼の話し方は有名で、そこから「スキタイ人の話し方」ということわざがアテネで作られた。

しかしながら、この著作が扱っているのはこの賢人のアナカルシスのことではなく、その子孫のことである。時代も異なっていて、紀元前4世紀となっており、子孫の若きアナカルシスがギリシアを旅行するという空想旅行記が、バルテルミー神父のこの著作だった。大成功を取めた読み物で、18世紀のヨーロッパで流行し、ひろく読まれていた。若きシャトーブリアンも愛読したと思われ、『革命試論』を執筆する際にも、この著作にたびたび助けられている。

著者のバルテルミー神父は王立図書館のメダル管理者を勤めた博学な人物で、古代語研究に能力を示し、バルミラ文字とフェニキア文字の世界初の解読者として知られている。

忘れてならないのは、1758年にマルゼルブ Chrétien-Guillaume de Lamoignon de Malesherbes の命を受けて、エルヴェシウス Claude-Adrien Helvétius の『精神について *De l'esprit*』の第二検閲官に選ばれていることである。マルゼルブは、出版統制局長時代に『百科全書』ヤルソンの著作に次々出版許可を出したことで有名な人物であり、租税法院長や國務大臣も歴任した政治家だったが、なによりもシャトーブリアンの兄の義父にあたる人物であり、この人物とはシャトーブリアン自身も親しく接していた。シャトーブリアンがアメリカ横断の冒険旅行に出る際に、アメリカ大統領ジョージ・ワシントンへの親書を託した人物でもあった。シャトーブリアンがバルテルミー神父を知っていたかどうかは不明だが、マル

ゼルブから話を聞いていた可能性はあり、『革命試論』の重要な参考資料となった著作の著者が、かならずしも、全く未知の遠い人物だったわけでもないとは推測される。

バルテルミー神父の著作を通じて、シャトーブリアンが古代ギリシアの賢者たちの魅力を発見し、それら賢者たちのイメージを作っていたと推測しておくことは、そう間違っていないだろう。異郷イギリスにあって、同郷者によるフランス語の著作を通じて人類の叡智のひとつに触れ続けることが若い亡命貴族の精神に大きな影響を与えたであろうことは、想像に難くない。

シャトーブリアンは1826年に『アバンセラージュ族最後の者の冒険 Les Aventures du dernier Abencérage』という小説を発表するが、この小説にはバルテルミー神父の著作から構成上のヒントを得ていると思われる部分もあり、『革命試論』執筆時の読書が後年のシャトーブリアンを形成していく上でかなり重要な土台となっていったのではないかと推測しておくのは、おそらく、無駄なことではない。

### 3 「空疎なシステム」とタレス

古代ギリシアの賢者たちを引きあいに出しながら、「空疎なシステム」よりも「民衆の幸福」を問題とすることのほうをシャトーブリアンは重視したが、彼の言う「空疎なシステム」とはなにを意味するのだろうか。

これは、古代ギリシアの賢者たちの中でも、唯一、彼が批判対象としたタレスのことを考えれば明瞭になるだろう。

タレスは古代ギリシアの最古の哲学者で、ミレトス学派の始祖といわれるが、測量術や天文学に通じていたことから、世界の起源についての神話的説明に飽き足らず、合理的説明を試みようとした初めての人物だった。水が万物の根源（アルケー）であるとし、すべての存在は水から生成し、また水へと消滅していくとした。したがって、世界は水から成り、やがて

水に帰っていくと考え、大地も水の上に浮かんでいるとした。

シャトーブリアンもこのように書いている。

賢者たちのはじめに、ミレトスのタレスが現われた。天文学者で、イオニア派の創始者である。彼は、水が世界の物質の本源であり、そこに神が働きかけたと教えた。形而上学の精神の最初の種をギリシアに蒔いたのは彼である。しかし、これは人間にとって非常に無益なものであって、後になって彼の国に大きな災厄をもたらすことになり、また、さらに後、私たちの世紀を破滅させることになった。

(A la tête des Sages paraissait Thalès, de Milet, astronome et fondateur de la secte Ionique. Il enseignait que l'eau est le principe matériel de l'univers, sur lequel Dieu a agi. Ce fut lui qui jeta en Grèce les premières semences de cet esprit métaphysique, si inutile aux hommes, qui fit tant de mal à son pays dans la suite, et qui a, depuis, perdu notre siècle.)<sup>(7)</sup>

タレスについて語りながら、シャトーブリアンは、形而上学や合理的思考の無益さを示そうとしているかに見える。

あらゆる思考は、思考する本人にとってはすべてそれなりの合理性を持つはずなので、それに気づかずに彼がこのように語るのは奇妙なことに見えるが、シャトーブリアンがここで示そうとしているのは、伝統と社会を破壊するフランス革命を導いてしまうような類いの合理主義の問題性であり、また、その基礎になっている形而上学や自然科学の問題性であろう。革命以前のアンシャン・レジームのヨーロッパ社会は、精神的にはキリスト教によって支えられているが、キリストの復活や聖母マリアの処女懐胎を教義の基本とするキリスト教は、当然ながら、世界の起源を合理的に考えようとするような思考態度を退けるのでもある。

『革命試論』の後の著作『キリスト教精髓 *Génie du christianisme*』(1802)で、カトリック信仰への回帰を宣言することになったシャトーブリアンのことを知っている後世の読者としては、彼がキリスト教の側に立つのはごく当然のようにも見えてしまうが、しかし、注意しなければならないのは、1797年に出版される『革命試論』の執筆時には、彼はまだ、キ

リスト教の側に立った思考はしていなかったはずだということである。そもそもモンテスキュー-Charles-Louis de Montesquieu の『法の精神 *De l'Esprit des lois*』(1748) を彷彿とさせるような構えを持つ『革命試論』を企てる時点で、シャトーブリアンはまだ、18世紀フランスのフィロゾーフたちの精神の中に立っていたと見なすべきであろう。

おそらく、フィロゾーフたちの精神に浸ってそれを学びとり、政治や歴史を考えることを始めた若きシャトーブリアンが、古代ギリシアの諸革命を参照しつつ、自分たちフランス人を悲劇のどん底に陥れたフランス革命について考察していくうちに、フランス革命の源にあるフィロゾーフたちの合理主義の危険さに気づき、少しずつ、精神の内的変革が進んでいったものと思われる。シャトーブリアンの思想の変質過程を逐一記録しているという点で、かなり読みづらいところのある『革命試論』は、貴重であれば、作家・思想家・政治家の誕生を如実に示す、生成そのものの著作であるとも言えよう。

#### 4 ピッタコスとペリアンドロス

形而上学的思考や合理的思考の始祖タレスを批判した後、シャトーブリアンはすぐに統治形態の問題の検討に入っていくが、この際に引きあいに出されるのは古代ギリシアの賢者たちの考え方である。

キロン、ピアス、クレオプロスはあまり知られていない。ピッタコスとペリアンドロスは、彼らの徳の高さにもかわらず、自分の国において暴君となることを受け入れた。前者はミティレーヌで統治し、後者はコリントで統治した。彼らはおそらく、キケロのように、主権(統治権)は、民衆の中ではなく、偉大な才能の中にあらかじめ存在していると考えていた。

(Chilon, Bias, Cléobule sont à peine connus. Pittacus et Périandre, malgré leurs vertus, consentirent à devenir les tyrans de leur patrie ; le premier régna à Mitylène, le second à Corinthe. Peut-être pensaient-ils,



comme Cicéron, que la souveraineté préexiste, non dans le peuple, mais dans les grands génies.)<sup>(8)</sup>

スパルタの民選長官キロン、プリエネの僭主ビラス、リンドスの僭主クレオプロス、ミュティレネの僭主ピッタコス、コリントスのペリアンドロスらは、みな、古代ギリシアのいわゆる七賢人と呼ばれる人々に属している（プラトンが『プロタゴラス』に挙げた選び方に基づくが、書物によって選び方はまちまちだとも言われ、賢人と呼ばれる理由も明確ではない）。ちなみに、引きあいに出されているキケロは、もちろん、共和制ローマ末期の政治家、哲学者、文筆家だった人物であり、シャトーブリアンは『革命試論』において、たびたび彼の言説に言及している。

ここでは、なんといっても、暴君であるにもかかわらず、賢人と伝えられているピッタコスとペリアンドロスの主権（統治権）についての考え方が注目される。主権（統治権）が「偉大な才能の中にあらかじめ存在」しており、しかも、「民衆の中に」はないという考え方は、そのまま王政支持の表明に通じるわけではないものの、少なくとも、民主制の否定には通じる。シャトーブリアンは、ここではっきりと民主制の否定を謳っているわけではなく、あくまで古代ギリシアのふたりの賢人政治家の考えを挙げているだけのことだが、これはやはり背後に考えのあるレトリックと見るべきで、フランス革命におけるジャコバン派批判が表明されていると言ってよいだろう。

もっとも、民衆より抜きん出た能力のある人物が統治することこそよしとするこの考え方では、フランス革命におけるロベスピエールやサン＝ジュストらのような革命家が統治することの正当性を拒否することはできない。もしシャトーブリアンがここでジャコバン派批判を目論んだのならば、この点を看過していたと言わねばならないだろう。

また、きわめて興味深いことだが、「主権（統治権）は、民衆の中にはなく、偉大な才能の中にあらかじめ存在している」という表現は、フラ

ンス革命期の革命家たちよりも、その後に出現するナポレオンにこそふさわしく、シャトーブリアンがやがてナポレオンと実際に関わって敵対していくことになり、ナポレオンの死後も生涯にわたって考察対象としていくことになるのを思うと、不思議に予言的な文章になっているとも見える。

## 5 ギリシア七賢人の統治形態論

ピッタコスとペリアンドロスの主権（統治権）についての考え方を見た後、シャトーブリアンは、ギリシア七賢人のうちの他の賢人たちが「最良の統治形態について」どう考えていたかを見ていく。

ソロンによれば、市民が集団となり一塊となって、罵詈雑言を個人に向ける統治形態である。

ピアスによれば、法が専制君主であるような統治形態である。

タレスによれば、財産の平等が支配する統治形態である。

ピッタコスによれば、正直な人間が統治し、悪意のある人間は絶対に統治しないような統治形態である。

クレオプロスによれば、批判への恐れが法よりも強い統治形態である。

キロンによれば、法が雄弁家のかわりに語るような統治形態である。

ペリアンドロスによれば、権力が少数の者たちの手のうちにあるような統治形態である。

Selon Solon, c'est celui où la masse collective des citoyens prend part à l'injure offerte à l'individu.

Selon Bias, celui où la loi est le tyran.

Selon Thalès, celui où règne l'égalité des fortunes.

Selon Pittacus, celui où l'honnête homme gouverne et jamais le méchant.

Selon Cléobule, celui où la crainte du reproche est plus forte que la loi.

Selon Chilon, celui où la loi parle au lieu de l'orateur.

Selon Périandre, celui où le pouvoir est entre les mains du petit nombre.<sup>(9)</sup>

これらを見ると、理想の統治形態については、古代ギリシアですでに

様々な考え方があったということになる。近代と違って、古代ギリシアの場合は、こうした考えが思想家や政治学者によって出されたのではなく、自ら政治家として働いた賢人たちによって提出された点に特徴がある。

アテナイの立法者であったソロンは「市民が集団となり一塊となって、罵詈雑言を個人に向ける統治形態」を最良としているが、この場合の「個人」は、統治者として主権を行使する者を指しているのだろう。市民から絶えず批判を向けられ、言動がチェックされるかたちであり、これは民主制のイメージに近い。

スパルタの民選長官であったキロンの場合は、「法が雄弁家のかわりに語るような統治形態」を最良としており、法治国家を勧めている。プリエネの僭主ピアスが最良と見なす「法が専制君主であるような統治形態」も、厳格に法が統治する状態を求めたものといえる。

タレスが最良とする「財産の平等が支配する統治形態」は共産制を想起させるが、シャトーブリアンの時代で考えれば、ジャコバン派の理想とする統治形態となるだろう。シャトーブリアンがタレスに批判的だったことは先に見たが、彼にとってはタレスとジャコバン派が直結するものと見えていた可能性がある。

リンドスの僭主クレオブロスは「批判への恐れが法よりも強い統治形態」を最良としているが、これは、統治者が民衆からの「批判」を適切に「恐れ」というかたちを語っているものだろう。そうした「批判」を法よりも恐れるというのは、法にもとづく政治システムに従うという以上に、統治者からの民衆への配慮がいっそう積極的に発揮される状態を語っている。法を整備しただけで良しとするのでない、より「人間」的な配慮が統治者に求められている点で、冒頭に見た森嶋通夫の「人間が土台」という社会の見方に通じていく。

ミュティレネの僭主ピッタコスが最良とする「正直な人間が統治し、悪意のある人間は絶対に統治しないような統治形態」ともなれば、クレオブ

ロスよりも統治者の「人間」性に重きを置くかたちに進んでいる。統治者が「正直な人間」か、「悪意のある人間」かは、外に現われ出る能力とは異なったものを判別することが要請されるため、いかなる政治制度や判定方法によっても、厳密な判別はできない。人間の内面を見抜き、評価することが問われているので、人間性を観察する能力のある者による高度で総合的な判断が必要とされる。ピッタコスが、身分を越えて勝手に君主を名乗った僭主であり、非合法手段で政権を獲得した独裁者であったのを思えば、驚くべき精妙な政治的洞察がここでは語られていると言える。が、逆に、既成の政治システムに安住して頼っていれば危難に陥りかねない僭主の立場にあったからこそその慧眼とも言えよう。

ペリアンドロスが最良とする「権力が少数の者たちの手のうちにあるような統治形態」は、賢人政治を意味するもので、優れた人物たちによる寡頭制を想起させるが、賢明な王による王制も含まれてくるだろう。ここでもやはり、統治者の「人間」が問われている点で、システム信仰を超える精妙な人間洞察の必要性が提示されていると見るべきである。

## 6 モンテスキューとルソー

古代ギリシアの賢者たちによる統治形態のこうした理想を見た上で、シャトーブリアンは近代ヨーロッパの統治形態論の代表として、モンテスキュー-Montesquieu とルソー-Rousseau のそれを見ていく。

モンテスキューはこの大問題を未解決のままにしている。彼は様々な統治原理を挙げているが、どれか選ぶとすれば自分としては制限王制を選択する、と述べるに留めている。「過度の理性（の行使）は有害であると考え、人間には極端なものより中間的な企てのほうが適していると考える私としては、はたして、制度というものの卓越性についてはなんと弁じたらよいのだろうか？」と、どこかで言ってもいる。

「最良の統治形態はどのようなものかと問う時、人は確定できない解けない問題を提起しているのだ」とルソーは言う。「だが、お望みならばこう言

ってもよい。民衆の絶対的な状況ないしは相対的な状況に応じて、可能な様々な組み合わせが存在する数だけ、この問題には多くのよい答えがあるのだ、と」。

Montesquieu laisse cette grande question indécise. Il assigne les divers principes des gouvernements, et se contente de faire entendre qu'il donne la préférence à la monarchie limitée. « Comment prononcerais-je, dit-il quelque part, sur l'excellence des institutions, moi qui crois que l'excès de la raison est nuisible, et que les hommes s'accommodent mieux des parties moyennes que des extrémités ? »

« Quand on demande, dit J. -J. Rousseau, quel est le meilleur gouvernement, on fait une question insoluble, comme indéterminée ; ou, si l'on veut, elle a autant de bonnes solutions qu'il y a de combinaisons possibles dans les positions absolues ou relatives des peuples. »<sup>(10)</sup>

古代ギリシアの賢者たちに比べて、近代の代表的な政治思想家ふたりを貶めようとしているわけではないだろう。シャトーブリアンは、モンテスキューとルソーのことは、つねづね批判の対象としているフィロゾーフたちとは別格に扱っているように見える。

モンテスキューが「過度の理性（の行使）」を有害と見、「極端」を避けて「中間的な企て」をするほうがよいと考え、「制度」重視に偏らない考えを採っている点などは、後年のシャトーブリアンの保守主義の根幹をなす態度そのものと見てよい。「中間的」ととりあえず訳した「moyennes」は、「平均的な」とも「並の」とも「凡庸な」とも訳しうる表現だが、保守主義者ならばどのような場合にもみずから進んで選ぶような“やつし”に似た態度に通じるもので、ここにはもちろん、視野の狭い理性信仰に対するアイロニーに満ちた批判がある。モンテスキューが、最良の統治形態という「大問題を未解決のままにしている」ところも、曖昧な態度として非難されるどころか、保守主義的思考から見れば、臨機応変な言動を可能にし得るための自由の担保とも、変動極まりない状況に対応し続けるための真に理性的な嗜みとも映る。「大問題を未解決のままに」しておくのは、つねに最高の理性の証なのである。

ルソーも、「最良の統治形態」という問題に対しては、モンテスキューと同じ態度を表明していると見てよい。「確定できない解けない問題」と表現している点で、思いもよらないようなルソーの保守主義的思考がここには露呈している。さらに、「民衆の絶対的な状況ないしは相対的な状況に応じて、可能な様々な組み合わせが存在する数だけ、この問題には多くのよい答えがある」というのは、なんらかの制度やシステムを盲信するのとは異なった、臨機応変な現場主義のようなものを優位に置いていることの表明と読んでよい。

このように見てくると、シャトーブリアンが理想の統治形態を考察しようとした『革命試論』の第1部24章のこの箇所では、彼が模範と仰ぐ考え方が簡明に見直されていると受け止めておくことができそうである。じつは、シャトーブリアン自身がこの点ではやや混乱していて、古代ギリシアの賢者たちと近代のフィロゾーフたちとを対立させ、前者の優位を強調している場合もあり、壮大な問題に取り組んではみたものの若書きの感が否めない『革命試論』なのだが、今回のように落ち着いて見直してみれば、やはり若きシャトーブリアンはモンテスキューやルソーの考え方の系譜にはっきりと属しているのがわかってくる。そればかりか、モンテスキューやルソーも、伝統を切断してやみくもに革新を追及するばかりのフィロゾーフというイメージの中には収まりにくい、保守主義的思想家としての面を多分に持っていたのがわかってくる。

ちなみに、『革命試論』の1826年の新版には、歳を重ね48歳となったシャトーブリアン自身による自己批判の注が付されていて、これがまた『革命試論』をさらに豊かにもしていれば、複雑化して読みづらくもしているのだが、ルソーについては非常に批判的な評価が記されている。しかし、『エミール *Émile ou De l'éducation*』、『新エロイズ *La Nouvelle Héloïse*』、『サヴォワの助任司祭の信仰告白 *La profession de foi du vicaire savoyard*』、『告白 *Les Confessions*』、『孤独な散歩者の夢想 *Les Rêveries du promeneur solitaire*』などへの言及に止まっており、肝心の『社会契約論 *Du contrat*

social』には触れていない。

## 7 社会の統治形態と人間内部の統治権

最良の統治形態について、古代ギリシアの賢者たちと近代のフィロゾーフたちの考えを比較しながら進められた考察を、すでにこの論考の冒頭に掲げておいたかたちで、シャトーブリアンはまとめている。もう一度見直しておこう。

ギリシアの賢者たちは人間を精神のあり方にもとづいて見ており、わが国のフィロゾーフたちの場合は人間を政治的な関係のあり方から見ていた。前者は、統治形態が生活慣習から導き出されてくることを求め、後者は、生活慣習が統治形態から導かれてくることを求めた。

(Les Sages de la Grèce aperçurent les hommes sous les rapports moraux ; nos Philosophes d'après les relations politiques. Les premiers voulaient que le gouvernement découlat des mœurs ; les seconds que les mœurs fluassent du gouvernement.)<sup>(11)</sup>

彼はまた、このようにも書いている。

古代ギリシアの賢者たちは、人間を、人間が自分自身と結んでいる関係性によって見ていた。彼らが望んだのは、人間が自らの魂の奥底から幸福を引き出すことだった。我々の時代のフィロゾーフたちのほうは、人間を社会的な連関によって見ている。そして人間から、共同体の残りの部分についての喜びが、あたかも税金のように天引きされてしまうことを望んだのだ。このことで、彼らにとっての一種の格言のようなものが生じてくることになる。「神々を敬え、おのれを知れ。社会からは最小限のものを買い、最大限の値で売れ」。

古代ギリシアの賢者たちと近代のフィロゾーフたち。このふたつの種類の哲学者たちを見てきての結論は、短く言ってみれば次のようになる。ギリシアのよき時代にあっては、神の存在が全き拠りどころとされていた。それに対し、われわれの時代は無神論に依拠しているのである、と。

古代ギリシアの賢者たちは「有徳であれ、そうすれば自由になれるだろう」と民衆に言っていた。それに対し、近代のフィロゾーフたちは「自由

であれ、そうすれば有徳になれるだろう」と民衆に叫んでいる。古代ギリシアは、あのような原理によって共和国と幸福へと到達した。われわれのほうは、それと反対の哲学によって、さて、なにを手に入れようとするのだろうか？

(Les Sages considérèrent l'homme sous les relations qu'il a avec lui-même ; ils voulurent qu'il tirât son bonheur du fond de son âme. Nos Philosophes l'ont vu sous les connexions civiles ; et ont prétendu lui faire prélever ses plaisirs, comme une taxe, sur le reste de la communauté. De là ces résultats de leurs sortes de maximes : « Respectez les dieux, connaissez-vous ; achetez au minimum de la société et vendez-lui au plus haut prix. »

Voici, en quelques mots, la somme totale des deux philosophies : celle des beaux jours de la Grèce s'appuyait tout entière sur l'existence du grand Être : la nôtre sur l'athéisme. Celle-là considérait les mœurs, celle-ci la politique. La première disait aux peuples : « Soyez vertueux, vous serez libres. » La seconde leur crie : « Soyez libres, vous serez vertueux. » La Grèce, avec de tels principes, parvint à la république et au bonheur ; qu'obtiendrons-nous avec une philosophie opposée ?)<sup>(12)</sup>

古代ギリシアの賢者たちが「人間を、人間が自分自身と結んでいる関係性によって見て」おり、近代のフィロゾーフたちが「人間を社会的な連関によって見」ている、とシャトーブリアンは書いているが、ここで問われているのは、人間が人間として生き得るためには、自分自身との内的関係の創造や調整だけで足りるとするか、それとも、社会との連関がなければ不可能であるとするか、ということである。社会との連関がなければ人間が自分自身の「人間」を生き得ないのだとするならば、人間は自らの主権 *souveraineté* を社会との連関というものに永遠に委ねてしまうことになり、社会との連関に対する臣下や臣民でしかあり得なくなってしまう。*souveraineté* が統治権とも訳され得る語なのを考えれば、シャトーブリアンが近代のフィロゾーフたちを批判するのは、彼らの哲学が、自己の統治権の放棄を当然のように人間に強いてしまうためである。

社会における統治形態を考察しようとしながら、シャトーブリアンは自



己の内的な統治ということを重ねあわせて考察しようとしている。人間についての思索が、政治学、哲学、倫理学、宗教、精神分析などへの分化を経た後の時代にいるわれわれとしては、古代ギリシアの賢者たちの統治形態論にもう少し留保を付けながら注意深く扱い、社会の政治領域における統治形態と人間の内的な自己統治の問題とを切り離して扱ったほうがよいと考えるのが普通だろうが、しかし、不用意にそうした整理をし過ぎてしまえば、社会の統治形態がじつは内的な自己統治と緊密に結びついている、というせっかくの気づきを無駄にしてしまうことにもなる。少なくとも、シャトーブリアンはそうした問題認識に立って、人間内部の統治権と社会とを見ていたのである。

注

- (1) 森嶋通夫「なぜ日本は没落するか」(岩波書店、1999)。引用は岩波現代文庫版(2010)よりp.5。
- (2) 正式な題名は *Essai historique, politique et moral sur les révolutions anciennes et modernes, considérées dans leurs rapports avec la Révolution Française*。
- (3) Chateaubriand 《*Essai historique, politique et moral sur les révolutions anciennes et modernes, considérées dans leurs rapports avec la Révolution Française*》(*Essai sur les révolutions・Génie du christianisme*, édition de Maurice Regard, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1978), pp.126-127.
- (4) マイケル・オークショット「政治における合理主義」(嶋津格他訳、勁草書房、1988)、p.2。[Michael Oakeshott: *Rationalism in Politics and other essays*, 1962]
- (5) *Essai sur les révolutions*, Le chapitre XXIV.
- (6) *Essai sur les révolutions・Génie du christianisme*, édition de Maurice Regard, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1978), p.1473.
- (7) Ibid., p.120.
- (8) Ibid., p.120.
- (9) Ibid., p.121.
- (10) Ibid., p.121.
- (11) Ibid., pp.126-127.
- (12) Ibid., pp.128-129.